

〈論文〉

ジョナス・メカスによる 365 日映画の軌跡 ——記憶と忘却の狭間で

三 上 勝 生

はじめに

独立系の映画監督として世界的に知られるジョナス・メカス (Jonas Mekas, 1922-) は 2007 年 1 月 1 日から同年 12 月 31 日まで 365 日間にわたって、毎日一本の短編映画 (a short film) を公式サイト JONASMEKAS.COM (<http://www.jonasmekas.com/>) を通じてインターネット上で配信し続けるという無謀とも思える「365 日映画」企画を実行に移し、ついに完遂した。

2006 年 12 月 19 日、WIRD ニュースは “Short Films From a Long Life” と題したジョナス・メカスへのインタビュー記事を掲載した¹。これがジョナス・メカスによる 365 日映画企画の初公表であった。メカスのそれまでの活動を知る私にとっては、正に寝耳に水の公表で、その記事を読んだ時にも、フィルム作家としてのメカスがインターネットを利用してビデオを配信するはずがないという先入観は完全には払拭しきれなかった。しかも 365 日毎日短編映画をアップするなどという無謀な企画は、よもや実際に始められたとしても、そう長くは続かないだろう、と高を括っていた。実際にメカス本人も、そのインタビューの中で「この 365 日企画は内容的にはおよそどうなるか分からないし、むしろ一体何が起こるか見てみたいと思っているくらいだ (This 365 project is more about the unpredictability. I'm curious to see what will happen with this adventure.)」と告白していたのだった。そして「分かることと言えば、最後には 365 本の映画があるということだけさ (All I know is that at the end I'll have 365 films.)」と語ってはいたが、にわかには信じ難かった。しかも本当に 2007 年 1 月 1 日から 365 日映画は始まるのだろうか、という疑いさ

え私は抱いていた。

ところが、そんな私の疑念を快く裏切るようにして、2007年1月1日から365日映画企画はきっちりと実行に移された。私はとにかく開始されたら、一本残らず最後まで見届ける覚悟だけは決めていた。そして公表通りに毎日一本配信される「映画」(Film)を観ては、『三上のブログ』上で翻訳を兼ねて紹介するということをはじめた²。そのうち、メカスのこの企画にかかる意図や並々ならぬ意気込みに共感を覚えるようになるにつれて、メカスは本当に365日やり遂げるだろうかという当初の疑念は完璧に消え去り、むしろ私自身が365日伴走できるだろうかという不安が大きくなっていったほどだった。

365日映画では、ひと月を大きな区切りとして、月の最終日にはその月の全日の映画を振り返る趣向が4月から取り入れられた。1月から3月までは最終日は関係スタッフがひと月の終了を祝う「儀式」が行われた。公式サイト JONASMEKAS.COM の専用ページには月ごとのカレンダーが表示され、その日配信された映画の代表的シーンのサムネイル写真が次々と「貼られ」て行く。月を追う毎に、次第に365日すなわち12ヶ月が、12区間を自分で次の自分にバトンタッチしてゆく「駅伝」のように感じられるようになった。

私は365日映画を『三上のブログ』で毎日紹介し続けた。結局、2007年12月31日、365日目までなんとか「完走」した。途中、メカスは何度か365日企画を発展させる可能性について示唆していた。そして12月30日にはついに「千夜一夜企画 (the 1001 Nights Project)」を発表した³。2008年7月1日から開始する予定である。「千夜一夜企画」は、基本的に世界中から有志の作品を公募するという内容であり、7月1日まで応募を受け付ける。

1 ひ と つ の 背 景

一般的に言えば、デジタル記録技術とインターネットを利用した通信技術の目覚ましい進歩は、従来のフィルム・アーティストたちの活動の幅を広げると同時に作品を公開する選択肢を増やすことになった。WIRD のインタビューでは、デジタル技術への移行に関して、それは言わば映画思想的な転向ではないかというインタビュアーの質問に対して、メカスはフィルム時代でさえ、8ミリカメラから16ミリカメラへの移行には作品内容に甚大な影響を及ぼす大きな断絶があったのであって、そのような技術による変容は、デジタル技術への移行に限った話ではない、と語った。技術の変化を受け入れることで、その変化に見合った内容の作品を作る。それだけのことだ、というわけである。ここには、利用する技術がどんなに変わろうが、自分が撮影したいものは変わらないという信念と思想が

窺える。

むしろ、技術そのものよりも、技術の進展によって可能になったと言える通信環境の変化の方が、メカスにとっては予測不可能な事態を齎しうるという懸念があった。毎日短編を編集制作して配信するという企画が実現しえたのは、そうやって配信される映画を見ることができる世界規模の環境が出来上がったからである。すなわち、インターネットである。ただし、どんなタイミングで誰にどう届くかは分からない。世界中に散らばる顔の見えない不特定多数の人びとに向かって毎日映画を配信するということは、一体どういうことなのか、何が起こるのか、全く予測できない。そのことの不安をメカスは WIRD のインタビューでも、また企画がかなり進行し、3ヶ月が終わる日にも告白していたのだった。先はどうなるか分からない、と。

それに関連して、メカスは「多くの人に届けばいいというものではないんだ (My dream doesn't even have to do with reaching more people.)」⁴とも語っていた。この発言は概して経済的には不遇な、実験映画、前衛映画、アンダーグラウンド映画、芸術映画等と呼ばれる独立系の映画制作に携わる映像作家たちにとって、技術の進歩が少しでもその経済的境遇を改善することに繋がるのではないかという話の脈絡の中でのものである。確かに新しい技術によってより多くの人にそのような脱プロダクション・非商業主義的な映画が見られる機会が増えることで、収入も増えることは歓迎すべきことかもしれないが、そのような経済的な問題には還元されえない「映画そのものの問題」があるのだということを、メカスはその発言によって示唆したかったようだ。つまり、そもそも映画とは何かという問題である。そしてそれは後述するように人生とは何かという問題に直結している。

2 舞台裏

WIRD のインタビュー記事の中で、メカスは 365 日映画の基本構成については、次のように語っていた。

I have so much footage. I've been videotaping my life, my friends' lives, wherever I go since 1987. That's 20 years worth of video, thousands and thousands of hours. I never knew what to do with it. I made one compilation. But otherwise there it sits.

Most of my videos consist of fragments, one or two minutes long. They are haikus or sketches. I have thousands. So now, beginning Jan. 1, I'll finish one film a day. Maybe one-third will use old material, and two-thirds will use new.⁵

すなわち、おもに一方では過去 20 年間に撮り貯めた膨大な量のフッタージ（未編集のビデオ）を素材として用い、他方では新たに撮り下ろす新しいビデオを用いて、毎日一本の映画（one film a day）を作るということである。実際に 365 本の映画の大半は当然のごとくメカス自身が撮影した新旧のビデオが素材として用いられた。ただし稀に 60 年代、70 年代のさらに古いフィルムの一部が用いられた。

またメカス以外の人物によって撮影されたビデオ素材も引用された。例えば、365 日映画の制作スタッフでもあるジョナス・メカスの息子のセバスチャン・メカス（Sebastian Mekas, 1981-）、英国出身の映像作家ベン・ノースオーバー（Benn Northover, 1981-）、そしてリトアニア出身の音楽家オーグスト・ヴァルカリス（August Varkalis）などが撮影したビデオ素材が部分的にせよ縦横に使われた。また注目すべきことに「ビデオ・ポストカード（video postcard）」と題された他の映像作家の短編作品がそのまま配信されたこともある。

映画のデジタル編集およびインターネット関連の作業は、若いセバスチャン・メカスとベン・ノースオーバーを中心とするスタッフによってアンソロジー・フィルム・アーカイブズ（Anthology Film Archives）内のスタジオで行われた。そのいわゆるアンソロジーとは、メカスが所長を務めるニューヨークはブルックリンにある一種の映像博物館である。アンソロジーでは 30 年以上に亘って消滅しかけたり散逸しかねない独立系の映像作品や関連資料を収集しつつ、保管・整理し、頻繁に一般公開も続けてきた⁶。メカスは自作映画のみならず、そのようないわば人類の記憶の一環としての映像記録のアーカイブ化活動における傑出した功績によっても世界的に高く評価されている。

そのようなメカスが、2007 年 1 月 1 日から、若い「友人たち」の力を借りながら彼自身それを「冒険」と称しながらインターネットにいわば進出したわけである。

3 映画とは何か

3 月 16 日（75 日目）の映画では、2007 年 3 月初旬に開催されたフィンランドのタンペレ国際短編映画祭の開会式でメカスが行った短い挨拶の模様をスタッフの一人が撮影した映像が用いられた。そのなかでメカスは次のような独自の映画観を披露した。

映画は一本の大きな樹のようなものなんだ。ハリウッド映画だけが映画じゃない。ハリウッドが見下すような映画もいっぱいあって、そのひとつひとつが掛け替えのない非常に大切なもので、大きな樹のような映画の中に場所を持つんだ。つまりそれらすべて

を合わせた全体が映画であり、人生なんだ。⁷

このように平易な比喩を使って語られる映画＝人生観は、アンソロジーの活動を支える大局的な理念になっていると同時に、彼自身が若い頃から続けてきた毎日日記のように撮影する映像と、それらを素材にして時間をかけて作る映画、そして今回の 365 日映画で配信された短編映画の本質的な特徴にもなっている。

12 月 24 日（358 日目）の映画では、1980 年にセントポール（St. Paul）の友人サリー・ディクソン（Sally Dixon）の家の前で別の友人が撮影したビデオが「自画像 1980 年（self portrait 1980）」と題されて用いられた。その中でメカスはほぼ同じような映画＝人生観を表明している。

映画って何か、本当に分からない。映画は常に拡張しているし、どんどん枝分かれしている。言語が成長し、変化するようにね。ある日これこそが映画だと思っても、翌日誰かが映画を別の方向に動かすってことが起こるんだ。だから、いつも始まり（beginning）にいるんだ。⁸

要するに、映画は決してひとつではないという見方である。言語が成長、変化するように、人間が成長、変化するように、映画も成長、変化する。そのような総体としての映画の動向のなかで、個々の多様な映画たちは他のすべての映画たちとの間に顕在的、潜在的な複雑な関係を結んでいる。そのような生きた関係を断ち切らずに、すべての映画のなかで、すべての映画との関係のなかで一つの映画を作り、見るということの大切さを、メカスはまるで人生の生き方として語っているようにさえ聞こえる。

4 映画日記とは何か

ジョナス・メカスは彼の映画を「映画日記」ないしは「個人映画」と呼び続けてきたことでも知られる。上の「自画像 1980 年」の中でメカスはこう語っている。

私の映画は非常に個人的、自伝的なもので、現実の生活をカメラで毎日記録して、いわば映画日記（Film Diary）を作るんだ。いうまでもなく、実際に編集を終えた一個一個のシーンは 3, 4 分足らずで、人生のちっぽけな、ちっぽけな断片に過ぎない。人生の大部分は映画にならずに過ぎてゆく。でもそれらをつなげた映画日記は人生全体を凝

縮したエッセンスとして表現するんだ。そんな映画もある意味ではフィクションかもしれない。でもその瞬間瞬間に強く感応して撮影したものから出来上がる映画は、時間的には人生のごく一部でしかないけれども、私の人生の本質を表現していると思う。⁹

365 日映画は文字通り 365 日間の日記の形式を守ることによって、メカスの映画の本質、映画に対するメカスの考え方、思想を改めて提示したと言えるだろう。それにしても、「映画日記」といわれる、その「日記」であることの意味は何か。それは必ずしも自明ではない。

3 月 30 日（89 日目）の映画の中で、メカスは、タンペレ国際短編映画祭に参加した前後のヘルシンキでの小規模な講演会において、司会者の質問に答える形で「映画日記」のいわば「日記性」に籠められた思想に関して少し立ち入って語った。そこではメカスの映画だけでなく、映画さらには芸術一般の理解にとっても非常に重要な「日記作家（diarist）」および「個人」という観点が述べられている。

司会者：あなたの映画はよく日記と呼ばれますが、いわゆる日記とあなたの映画はずいぶん違うと思います。というのも、日記は人生を整理するところがありますが、あなたの映画はもっとずっと断片的な印象を与えるからです。そのへんの違いについてお話し願えますか。

メカス：それは芸術とは何か、そもそも芸術はどのようにして作られてきたか、という問題だと思うんだ。芸術はあくまで作られるものなんだ。現実の人生の中で。私の映画はたいてい、私自身の人生、友人の人生についてのものだ。いつ、どこに行こうが、いる場所、見るもの、をどう感じるか、といった直接的な反応を大切にする。それを日記作家的な記録と呼んでもいい。私の人生の記録なんだ。

書かれた日記では、夕方や夜に一日のことを反省して記録するものだ。そしてそれは起こったこと、一日の間に起こったすべてのことに対して準備された何か違った光を当てることなんだ。でも、それは私がやっていることほど真実じゃない。

私が撮影するとき、自分の目の前で起こることを厳密に捕まえるんだ。普通、ひとが物事に光をあてるときには、物事そのものよりも感じたいことのほうを映し出してしまふ。でも、本当に起こったことこそが問題なんだ。回想録なんかを読むよね。それは過去を振り返ったものだ。でもそれは何か違うことなんだよ。それは本当に起こったことじゃない。あくまで個人的な反省にすぎないんだ。

だから、私がやってることと書かれた日記とはちょっと違うんだよ。それで、私は自

分のほうがずっと本来の日記作家 (diarist) だと思っているんだ。

それは芸術の違った形なんだ。日記作家的な音楽があり、日記作家的なダンスがあり、あらゆる形の芸術は過去 50 年から 60 年の間に日記作家的な取り組み方の感受性や日記作家的な人生の経験を繰り返し広げてきた。そういうダンスや音楽のムーブメントがある。それには必然性があったんだ。大事件のような物語ではなくて、本当の人生に向かう、違った内容、本当のことに向かうということなんだ。そこにはもっと沢山のことがあるんだ。芸術のすべてにはもっと沢山のことがあるんだ。ノーベル賞やりたいくらいのマックス・フリッシュ (Max Frisch), 知ってるだろう? (テーブルの上に用意された本の中からマックス・フリッシュの一冊¹⁰を取り上げて) これにはあらゆることが含まれている。芸術だ。

私が気落ちしてしまうのは、今、ここにはないものしか扱わない芸術だ。現実の人生は動いている。それに、私は私だ。みんな個人だ。そしてみんな異なった理由、本質を持っている。でもそれは影響を受ける。たしかに人生は絶え間なく流れる。だから、映画だけが楽園の瞬間としての人生を祝福することができるんだ。私の映画はいつもすでに行方なんだ。私のポリシーは行為 (act) なんだ。そう、美しいものをサポートすること。そして、人生に、流れに働きかけることなんだ。

われわれは、われわれに先行するものすべてに依存している。すべての死者、詩人、科学者が与えてくれるもの、それらすべてを裏切らないことがわれわれの義務なんだ。そして仕事を続けること。流れているだけではダメさ。(最後にポツリと言う。) 魚じゃないんだから。¹¹

こうして、いわば中間搾取形態を排した「すべて」と「個」の直接的な関係が回復される世界の相とそれに限りなく接近する「日記作家 (diarist)」の「行為 (act)」に基づいた「人生の記録」としての映画というビジョンが浮き彫りになってくる。

5 未来の映画：記憶と忘却の狭間で

3月31日(88日目)の映画の中では、前出のヘルシンキでの小規模な講演会の続きが見られた。そのなかでメカスは撮影の動機について興味深いことを語った。

司会者：カメラを持ち歩いて撮影している間、捉えられず逃れ去るものがあると思うのですが、それは不本意ではないのですか。

メカス：非常に沢山の偶然（chance）があるんだ。全部をつかまえることなんかできっこない。例えば、今日一日24時間撮影し続けることもできるけど、それって（笑）、偶然じゃないよね。私の場合は、その瞬間に撮影する必要（need）がなければならぬんだ。それは何かが私に触れて、それを私は記録したいと思うんだ、最初は自分自身のためにね、その後は他の人たちと共有するんだが。それは必要、必然性であって、決して自動的なものではない。私にとってはつねに必要なものではないんだよ。私が見ているものを個人的に記憶しておくためにね。それは捨てないで取っておきたいものなんだ。言い換えれば、自分が反応したものを忘れたくないんだ。それは奇妙な強迫観念かもしれないけどね。

そしていつも幸せな瞬間を祝福しなければならないと思っているんだよ。反対に、醜いものや人の気持ちを落ち込ませるようなものには興味はないんだ。ホラーとかね。好きなのは、何かが起こって、それで皆がちょっと幸せになるような瞬間なんだ。話したり、食べたり、特に何かをしているわけではない時のね。ちっぽけで目につきにくい、だれも注意を払わないような瞬間。みんな大きな劇的な出来事に眼を奪われるけど、そういうものに興味はないんだよ。ないんだ。放っとけばいい。¹²

ここで言われる「幸せな瞬間」、「それで皆がちょっと幸せになるような瞬間」、「ちっぽけで目につきにくい、だれも注意を払わないような瞬間」を「祝福」とは一体どういうことなのか。

1996年4月4日愛知芸術文化センターで開催された「映像時代のヒューマニズム」と題されたジョナス・メカスの新作・日本未公開作品上映と講演会の記録の中に、当時三度目の来日を果たしたジョナス・メカスと今福龍太の興味深い対談の抜粋が収録されている。

今福：僕はいつも思うんですが、メカスさんの映画に出てくる食べ物や飲み物は、もう本当においしそうに見える。味覚や嗅覚に訴えて、食べ物の匂いがプンプンするんです。一般的に映像は目という肉体器官を使って撮るとされているのですが、それ以外の感覚、つまり味覚、嗅覚、もっとデリケートな身体感覚……そういうものとメカスさんにとってのフィルムとはどういう関係にあるのでしょうか。

メカス：目で見たものをカメラを使って撮影するのですが、ただ目だけではなく、頭も、心も、細胞の一つ一つ、体の全てを使って撮影しています。それに加えて、私の記憶の全て、“忘れること”の全ても撮影には関わっています。それから、撮影をする瞬間は

非常に凝縮された瞬間であると同時にすっかりリラックスした状態でもあります。

今福：写真とか映像というのは、常に、記憶のための手段として様々に利用されてしまう。メカスさんの映画も表面的に見てしまうとこれは一つの個人的なノスタルジックな過去の追憶のような記憶、ロマンティックな動機に基づいている様に見えるのですが、お話をされていてどうもそうじゃないように感じるんです。

実はむしろ忘却、忘れ去られるものとか、忘れ去られたものがそこに写し出されている。メカスさんは記憶よりは忘却、忘れるということによりある種の親近感を感じているような気がするんですが……。

メカス：私は本当に自分が好きなものを撮影するようにしています。私にはなぜ自分は撮影するのかということはあっても、なぜそれを撮るかは分からないんです。私の撮り方というのはもっと直観的、本能的、その場のものに合わせて瞬間的に反応して撮っていますから、記憶とかを特に考えて撮影することはあまりありません。

ピエーロ・デラ・フランチェスカが天使の絵を描いていますが、本当はこの天使の美しい顔というのは百年戦争のまっただ中の実に悲惨な時代に描かれたものなんです。ですから現実とはまるで違い、フランチェスカは人々に対してこの本当に惨めな現実とは人間性の本来の姿ではなくて、この天使のような素晴らしいものがありえるんだということを、その自分の夢をそこに投影して描いたのではないだろうか。

だから必ずしも、この場合には絵画ですけれども、映画を作るにしろ、音楽を作るにしろ、現実との何かしら具体的なつながりが必ずあるわけでもなくて、様々な要素が創作に向かわせることがあるのではないのでしょうか。ですからフランチェスカは決して現在とか過去ではなくて未来を描いたのでしょうか。¹³

ここで注目すべきは、今福龍太が誘導しようとする記憶／忘却の二元論的土俵をメカスがかわしたことに、一見唐突に持ち出されたかに見えるピエーロ・デラ・フランチェスカの天使の絵の例が意味することであるように思われる。

つまり、メカスの真意は、ピエーロ・デラ・フランチェスカが「未来を描いた」ように、自分もまた映画を通して「未来」を描いているということにあるのではないだろうか。

そうだとすれば、「幸せな瞬間」、「それで皆がちょっと幸せになるような瞬間」、「ちっぽけで目につきにくい、だれも注意を払わないような瞬間」を「祝福」とは、全身全霊でそのような瞬間に反応し、忘れないために記録し、そのような記録を「絵の具」にして「天使の絵」のような「未来」を示す映画を創造することを意味しているといえるだろう。

6 個人映画とは何か

かつてメカスは『映画日記』の「序文」冒頭に以下のような1958年11月8日に書かれた文章を据えた。

私は地方主義者だ。それがありのままの私だ。私はつねにどこかの場所に所属している。どこへでもいいから私を置き去りにしてみたまえ。渴いた、生き物などまったくない、死に絶えた、そこで暮らしたいと思う人など一人としていないような不毛な土地に—私はそこで育ち始め、瑞々しくふくらむだろう。スポンジのように。私には抽象的な国際主義はありえない。将来のための足がかりを作っておこうともおもわない。私には、いまとここしかない。それは私が、むりやり故郷から引き離されたためであろうか？私がつねに新しい故郷を求めるのは、あそこ、あの土地以外のどの場所の人間にもなりきれないからだろうか？その私の幼年時代があった土地。もう永遠に取り戻すことはできないであろうか？¹⁴

メカスが弟のアドルファス（Adolfas Mekas, 1925-）とともに故郷を追われた末にリトアニアからの難民として米国に渡ったのは1949年である。それから10年後に、あるいはその10年間に、メカスはこのような絶望と断念に彩られた「いま、ここ」の思想とでもいうべき深い認識に到達したように思われる。

365日映画の中でも、2月26日（57日目）の映画ではメカスが不図大事なことを思い出したかのように「私は今どこにいる？」と呟く印象的な場面があった¹⁵。また、12月24日（358日目）の映画では先に引用した「自画像1980」の中でメカスは上で引用した1958年に書かれた思想をこう繰り返していた。

私はよく言うんだ。砂漠の真ん中に私を落としてみろってね。そこで私は深く広く根を張ってみせるよ。すべてに愛着を覚えていた故郷を強制的に追い出された後、私はどんな場所にも愛着を覚えるようになった。だから、どんな場所へ行っても平気さ。私は今正にここに愛着を覚えている。この場所（spot）にね。¹⁶

このような「いま、ここ」の思想は、普通は自明である国家や土地への帰属を根こそぎにされた人間が裸の個人として自らの存立の基盤を作ろうとする際に、そこがどこである

うが、「いま、ここ」として、普通の意味ではいわば「どこでもないところ」として組織する他ないことを意味するであろう。そして、そのような思想を生きざるをえない者が作る映画もまたそれが「どこでもないところ」を映し出すような映画であらざるをえないだろう。しかし、その「どこでもないところ」は、紛れもなく、その個人にとっての「いま、ここ」であることを通して、いわば「すべて」に開かれる、つながるという奇蹟のような逆転が起こる。メカスの「個人映画」は、そのような思いがけない普遍性への通路が至る所に存在することを物語っている。

7 高度な政治性

11月15日（319日目）の映画の中で¹⁷、故国リトアニアの市民権を回復したメカスは、翌11月16日（320日目）の映画の中では¹⁸、リトアニア大統領官邸に招かれ、さらに11月17日（321日目）の映画の中では¹⁹、リトアニアの首都ヴィリニウスに誕生したヨーロッパの新たな文化的拠点のひとつとして位置づけられたジョナス・メカス視覚芸術センター（Jonas Mekas Visual Arts Center）²⁰が大々的に紹介された。

また、11月20日（324日目）の映画の中では、友人の建築家のフランク・オーウェン・ゲーリー（Frank Owen Gehry, 1929-）やグッゲンハイム財団（Solomon R. Guggenheim Foundation）のトーマス・クレンス（Thomas Krens, 1946-）が関わるアラブ首長国連邦の首都アブダビの無人島に建設中のおそらく中東全域の文化的拠点たることが目論まれているはずの「幸福の島」（Saadiyat Island）建設といった大規模な文化事業が映っていた²¹。

普通に考えれば、とりわけ「幸福の島」（Saadiyat Island）建設などは、彼のこれまでの映像作家としての個人的、独立的な活動、そしてアンソロジー・フィルム・アーカイブズ（Anthology Film Archives）や映画作家協同組合（The Film-Makers' Cooperative）²²といった産業とは無縁に近い非営利組織の運営とは明らかに相容れない一線を画すものである。要するにそこには国家レベルの大きな意思が働き桁外れの金が動いている。それは単に芸術作品のマーケットのレベルの話ではないし、昨今流行のアート・プロデュースといったイベント企画レベルの話でもなく、もっと大掛かりな政治と経済、民族と国家の諸問題もからんだ国際的な最も広義の「文化事業」、「文化戦略」の話である。

そこには、世界の美術館を傘下に収めつつあるグッゲンハイム財団が深く関わっている。すでにベニス、ベルリン、ビルバオと、ヨーロッパに三つの拠点を設け、そしてアブダビにも、といった、まるで旧世界をフロンティアに定め、歴史の歯車を逆転させるかのようなグッゲンハイム財団の勢いは何を意味するのか。その動きを先導しているのがメカスの

友人でもあるグッゲンハイム財団の芸術部門のトップであるトーマス・クレンスである。私は当初そんなクレンスとメカスの接点はどこにあり、彼らはそれぞれ何を狙い、あるいは共に何を狙っているのか、さらに彼らの背景には何かあるとしたらそれは何なのか、という疑問さえ抱いた。

ジョナス・メカス視覚芸術センターにしても、表向きはグッゲンハイムの名は出ていないが、11月16日（320日目）の映画では、トーマス・クレンスはメカスと共にリトアニア大統領と面会している²³。ということはクレンス＝グッゲンハイムはすでにヨーロッパを北（リトアニア）から南（ベニス）まで、「文化事業的」に押さえ、次の一手をアブダビに打ったことになる。ちなみに、合衆国内はニューヨーク、ラスベガスを押さえている。次にもしアジアに一手を打つとしたら、東京だろうか、上海だろうか、あるいは……などと想像もした。

ところが、私のそれこそ政治的な疑問や想像をすり抜けるような繊細さでメカスはそのような現実をも差別せずに受け入れて映画にしまっているのだった。そのような映画そのものとそこに断片的に映し出される現実の姿から私が想像してしまう事柄との間で戸惑ったこともあった。

しかしすでにわれわれは徹底的に個人であるとは、なにものをも分け隔てしない、境界を設けない、差別しない、ということであることをみた。そしてすべてを受け入れつつ、すべてと繋がることで、逆に普通の意味で個人であることを超える。

5月16日（136日目）の映画の中で、メカスは60年代のアメリカにおける前衛的な芸術運動に関して、ハリウッドつまり娯楽産業化した映画界との関係について、広い意味でとにかく「戦い」は避けてきたと語った。つまり、色んな違うものが存在していていいんだということ。そしてフルクサスにしてもビートニクにしても、「精神性」が問題だったのではなくて、具体的な「ライフスタイル」こそが問題だったのだと語った²⁴。

このような姿勢こそが、多くの前衛的な活動がなにものかに「反」を唱え、「別」であることに固執するあまり、自らの土壌、土地を貧弱にしてしまうことによって終息していた陥穽に陥らずに、メカスの個人の活動とアンソロジーなどの組織の活動がたくましい植物のように成長してきた根本的な理由ではないかと思われる。そしてそれは或る意味で非常に高度に政治的な判断であると言えるのではないだろうか²⁵。

終りに

生まれ育った故郷を追われ、難民となったメカスにとっては、国家への帰属も、特定の

土地への所属も、もはや自明のことではなくなった。そんなメカスにとっては、抽象化していえば、どんな「境界」も自明ではなく、むしろあらゆる境界は捏造される虚構にすぎないという認識が生まれたに違いない。だからこそ、映画においてさえ何らかの境界を設けるような身振りは断固拒絶されることになる。その意味で、メカスの個人映画の「個人」からは、映画のあらゆる境界付けからの解放のメッセージを読み取ることができる。本当はありもしない境界を超える、その越境の身振りがあたかも冒険者であるかのような錯覚から自由なメカスは、住む場所に関しても、映画に関しても、どんな境界も存在しないような、普通の意味では同定困難であるような、「どこでもないところ (Nowhere)」としての「いま、ここ (Now, Here)」を生きるという真の冒険者であり続けている。

365 日映画企画の意義は、そのような冒険の延長として、いわばインターネットという不毛な土地を「いま、ここ」として毎日生きることを通して、そこに根を下ろすような試みとして解釈できるのではないと思われる。

私にとって、365 日映画に伴走し続けたことの意味は、そのような冒険のレッスンに参加したことであつたように思われる。

注

- 1 "Short Films From a Long Life", by Jason Silverman (Wired News, 12.19.06) <http://www.wired.com/news/culture/0,72318-0.html?tw=rss.index>
- 2 以下の 365 日映画全日への索引を参照のこと。Index of 365 Films 2007 by Jonas Mekas, ver.1 (『三上のブログ』2008-01-01) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20080101/1199201811>
- 3 「千夜一夜企画 (the 1001 Nights Project)」に関する詳細は、2008 年 1 月 3 日に配信されたビデオの中でメカスによって口頭で伝えられた。そのビデオは 365 日映画専用ページに追加された 2008 年 1 月のカレンダーの 1 日目に「366 日目」としてリンクされている。http://www.jonasmekas.com/Merchant2/merchant.mvc?Screen=CTGY&Category_Code=365undefined&mon=12
- 4 "Short Films From a Long Life", by Jason Silverman (Wired News, 12.19.06) <http://www.wired.com/news/culture/0,72318-0.html?tw=rss.index>
- 5 "Short Films From a Long Life", by Jason Silverman (Wired News, 12.19.06) <http://www.wired.com/news/culture/0,72318-0.html?tw=rss.index>
- 6 Anthology Film Archives の理念と沿革に関しては公式サイト <http://www.anthologyfilmarchives.org/> を参照のこと。その理念に関係することとして、単なるアーカイブでなく、あくまで「アンソロジー」であり、実際に「アンソロジー」と呼び習わすようになった経緯に関しては以下を参照のこと。「Anthology vs. Archives : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 1 月 18 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070118/1169108970>
また、アンソロジーの現状に関しては、東京国立近代美術館フィルムセンターのニューズレター(2006 年)に発表された 2005 年 9 月に実際にアンソロジーを訪問した映画研究家岡田秀則氏によ

る以下の報告を参照のこと。

「アンソロジー・フィルム・アーカイヴス—ジョナス・メカスの映画保存所」<http://www.ea.ejnet.ne.jp/~manuke/zatsu/eiga/anthology.html>

- 7 「映画の樹 Tampere Film Festival 2007」(2007 年 3 月 16 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070316/1174052546>
- 8 「self-portrait, 1980 : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 12 月 24 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071224/1198512193>
- 9 「self-portrait, 1980 : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 12 月 24 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071224/1198512193>
- 10 第二次大戦後のヨーロッパの経験を生き生きと描写したと評される, 「スケッチブック 1946-1949」ではないかと思われる。オリジナルは, 「Tagebuch 1946-1949」(Frankfurt: Suhrkamp 1950)。邦訳はない。英訳は「Sketchbook 1946-1949」(Harcourt Brace Jovanovich)。マックス・フリッシュの公式サイトは「Max Frish - Archiv」<http://www.mfa.ethz.ch/index.html>
- 11 「魚じゃないんだから Filming as Act : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 3 月 30 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070330/1175258904>
- 12 「千夜一夜の夢 : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 3 月 31 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070331/1175338096>
- 13 「映像時代のヒューマニズム」(1996 年 4 月 4 日愛知芸術文化センター) <http://www.aac.pref.aichi.jp/bunjyo/jishyu/PReport/96/96-09ja.html>
- 14 Jonas Mekas, MOVIE JOURNAL, Georges Borchardt, Inc., 1972. 邦訳『メカスの映画日記 ニュー・アメリカン・シネマの起源 1959—1971』(飯村昭子訳, フィルムアート社, 1974 年) p. 6
- 15 「私はどこに? I Wish I Knew : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 2 月 26 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070226/1172487440>
- 16 「self-portrait, 1980 : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 12 月 24 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071224/1198512193>
- 17 「Congratulate you on receiving back your citizenship, Jonas : 365 Films by Jonas Mekas」(『三上のブログ』2007 年 11 月 15 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071115/1195145261>
- 18 「The President of Lithuania, Vladas Adamkus : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 11 月 16 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071116/1195212880>
- 19 「Jonas Mekas Visual Arts Center opens : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 11 月 17 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071117/1195292834>
- 20 Jonas Mekas Visual Arts Center <http://www.mekas.lt/cms/en/home>
- 21 「An Architect, Frank Owen Gehry : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 11 月 20 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071120/1195568964>
- 22 アンソロジーと並ぶ重要な組織として映画作家共同組合 (Film-Maker's Cooperative) がある。メカスの社会的活動全般にとってアンソロジーといわば両軸をなすその映像作家組合の意義等に関しては, 以下を参照のこと。
「Film-Maker's Cooperative 公式サイト」<http://www.film-makerscoop.com/>
「ジョナス・メカスのもう一つの戦い The Film-Maker's Cooperative : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 5 月 1 日) <http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070501/1178013253>
- 23 「The President of Lithuania, Vladas Adamkus : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 11 月 16 日)

<http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20071116/1195212880>

<http://www.mekas.lt/cms/en/home>

24 「Poetic Cinema nowadays: not NYC but Paris : 365 Films by Jonas Mekas」(2007 年 5 月 16 日)

<http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20070516/1179325467>

25 かつて批評家蓮實重彦はメカスの代表作である映画『リトアニアへの旅の追憶』(1972 年)と著作『映画日記』(1974 年)とに衝撃を受けながら、それらの映画ならざる映画、本ならざる本に体现されているメカスの驚くべき「前衛」ぶりを称揚する文脈において、メカスの「いま、ここ」という立ち位置の意味を、徹底して非政治的であることを貫くことを通して逆に高度に政治的な美德を帯びてしまうような捉え難さにおいて捉えると同時に、哲学的思考の領域におけるミシェル・フーコーやジル・ドゥルーズの立ち位置との並行性について語った。(蓮實重彦『シネマの記憶装置』フィルム・アート社、1979 年、58-81 頁参照のこと。)

参考文献

ジョナス・メカス『どこにもないところからの手紙』(村田郁夫訳、書肆山田、2005 年)

ジョナス・メカス『フローズン・フィルム・フレームズ——静止する映画』(木下哲夫訳・フォトプラネット編集、河出書房新社、1997 年)

ジョナス・メカス『セメニシュケイの牧歌』(村田郁夫訳、書肆山田、1996 年)

ジョナス・メカス『森の中で』(村田郁夫訳、書肆山田、1996 年)

ジョナス・メカス『メカスの友人日記』(木下哲夫訳、晶文社、1989 年)

ジョナス・メカス『メカスの映画日記』(飯村昭子訳、フィルムアート社、1974 年)

Jonas Mekas, I Had Nothing to Go, Black Thistle Press, 1991

Jonas Mekas, Anecdotes, SCALI, 2007.

参考サイト

Jonas Mekas - Biography (WWW.JONASMEKAS.COM) <http://www.jonasmekas.com/bio.php>

Jonas Mekas (sense of cinema) <http://www.sensesofcinema.com/contents/directors/05/mekas.html>

Jonas Mekas (Wikipedia, the free encyclopedia, 5 November 2007) http://en.wikipedia.org/wiki/Jonas_Mekas

「バイオグラフィー (Biography)」(メカス日本日記の会ホームページ) <http://www.amy.hi-ho.ne.jp/morikuni/mekas2.htm>

「ジョナス・メカス・フィルモグラフィ」(イメージフォーラム/ダゲレオ出版) <http://www.imageforum.co.jp/mekas/f-lith-flmg.html>

「ジョナス・メカス」(ときの忘れもの) <http://www.tokinowasuremono.com/artist-all-mekas/index.html>

「Who's Who ; ジョナス・メカス Jonas Mekas」(wuemme experimental film) <http://blogs.dion.ne.jp/wuemme/archives/907246.html>